

「平和の俳句」

2020年08月18日

「東京新聞」は今年も「平和の俳句」を募集し、いとうせいこう氏、黒田杏子氏が選んだ30句を掲載している。過去最多の8,534句の応募があったそうで、平和に対する思いは深く、強いことを表している。俳句は季語を入れ、ある断面を切り取った写真のようであったが、「平和の俳句」は季語なしで、思想を読み込む深みのある文芸作品になったと言えるのではないかと。心に残る句を紹介し、私の感想を書きたい。

いとうせいこう氏の選句から。「色競うあじさいの花争わず 土井由三（79歳）富山県射水市」 私と同年である。最近世界では、米中の覇権争いから始まり、中東での内紛、新型コロナウイルスのワクチン製造に至るまで、争い事が多くなっている。争いに勝って、私が一番と言いたいのだろうが、力を基礎に置く、愚かな争いではないか。争うエネルギーと資金を平和構築に向けたら、人々はどんなに幸せになるだろうか。あじさいは競うことなく、様々な色で咲き誇っている。島倉千代子氏の歌「人生いろいろ」を思い出す。色々あって、共生する。それが平和である。

「半ペソの子を励ましてデモの母 西尾登美（66歳）浜松市天竜市」 上野駅前の「下谷教会」の伝道師に赴任した頃、東京教区東支区社会委員会主催の「靖国法案」反対月例デモを行った。毎月、参加を呼び掛ける葉書を200通くらい発送し、上野警察の公安に行きデモのコースの申請をした。この時、妻は乳飲み子の息子をベビーカーに乗せ、上野から浅草までのデモに参加した。西尾氏の句を読み、当時を思い出した。

「ありがとうと言ってくれてありがとう 鈴木主逞（すたく）（10歳）愛知県一宮市」 感謝されて、感謝の気持ちが湧き起る。素晴らしい連鎖で、この連鎖が平和を生み出すのではないかと。私はこの頃、見るもの聞くものに怒りを覚え、腹立たしい思いに駆られることが多い。悪性リンパ腫は快方に向かっているし、したいことがどうやらできる状態である。感謝すべきである。最年少の鈴木君の句から、教え、諭された気分である。

黒田杏子氏の選句から。「車椅子押され押す人晩夏光 田村一雄（102歳）東京都江戸川区」 最高齢者の句である。約70年連れ添った亡き妻との晩年の穏やかな日々を詠んだ句だそうである。体が弱く、徴兵検査で不合格になり、出征できなかった。病弱ながら102歳まで生きて、介護付き施設に入居し、俳句をたしなみながら平穩に過ごしておられる。

「欲張ってはいけない。みんなが感謝の気持ちで接する社会に」と願っているという。

「へいわとはにんげんにだけできること 尾前勝軍（14歳）東京都江戸川区」 人間が戦争を起こす。そうならば、人間が戦争を止めて、平和を造ることができるはずだ。動物は食を得て、繁殖するために死闘する。人間だけが、死闘せずに、知恵と勇気で平和を造ることができる。見抜いた尾前君の視点に賛意を表わしたい。名前が「勝軍」とは面白い。「軍」に勝って、平和を創り出すというのであろうか。

「卒寿とは！ 爆死の友は15才 柳澤和子（90歳）東京都台東区」 敗戦後75年が経ち、柳澤さんは90歳の卒寿を迎えた。感嘆符！を入れてある。戦後、苦勞されたのだろうと想像する。しかし、同級生だった友が15歳で爆死したことを忘れることはなかった。爆死した友と生き延びた自分を比べて、考え込んでしまう。そして、戦争の非情さを思う。日本人の大半は、柳澤さんと同じように、肉親、友だちの死を思いながら、過ごしてきたのではないかと。無念に召されて逝った人々に恥じない生き方をしてきたか、また、しているかを問われる。